

# よしきい

2019年1月27日



## 目次

- ・公園の風景
  - 自然界の掟・・・・・・・・・・ 1
  - キラキラ池が普通の池に・・・・・・・・ 1
  - 子どもレンジャーが行く⑤・・・・・・・・ 1
  - 公園の植物（ミチタネツケバナ）・・・・ 1
- ・公園をみる・観る
  - う・・・・・・・・・・ 2
  - Kさんの、あんなとりこんなとり・・・・ 2
- ・活動紹介
  - 新年昼食会と全体ミーティング・・・・ 3
  - クリスマスリースを作ろう、  
盛況のわけは・・・・ 3

発行：「葦の会」  
編集：機関紙チーム  
事務局：〒754-1277 山口市阿知須 509-53  
山口県立きらら浜自然観察公園内  
電話 0836-66-2030  
FAX 0836-66-2031

～ ご一緒しませんか～  
会員募集中！（高校生以上）

# 公園の風景

## = 自然界の掟 =

1月の冬晴れの空をゆっくりと舞いながらトビやチュウヒ、ミサゴなどの猛禽類が眼下のヨシ原や池にいる獲物を探している。園路を歩くと大量の灰色の羽毛が散乱している場所に出くわし思わず息を呑んだ。オオタカがカモ類のオオバンを捕食した跡なのだという。公園でオオタカにやられるのは大抵のん気なオオバンで、タヌキやキツネが残ったところの後始末をするそうだ。道端のあちらこちらに無残な灰色の残骸がたくさんあったが、他のカモのものらしい白い羽毛もあった。猛禽類の中でも食物連鎖の頂点にいるオオタカは、狙いを付けた獲物は必ず仕留めると言われている。一見のんびりと遊んでいるように見える公園の鳥たちも、抗うことのできない自然界の掟のもと、生きていくのは命がけなのだ。



## = キラキラ池が普通の池に =

昨年11月、突如淡水池に姿を現したオオハクチョウ。「もしかして越冬も!!」とおおいに期待したが、専門家の予想通り行く方知れずとなってしまった。12月13日に飛去して以来「もしかしたらまた帰ってきてくれるかも」と微かな期待を持っていたのだが、年も開けて1ヶ月経つ今となっては諦めざるをえない。オオハクチョウのオーラでキラキラ池だった淡水池は普通の池に帰った。歓迎するかのようにオオハクチョウの周囲をついてまわっていたカモたちも、今は何事もなかったかのように長閑に浮かんでいる。オオハクチョウはどこに行ってしまったのか。秋には元気な姿でまた訪れてほしいなあ。

でも、お馴染みのカモ類やカワウたちがのんびりと遊ぶ普通の池もいいじゃない。普通って最高よ。

## = 子どもレンジャーが行く⑤ =



冬眠中のチャミノガ

クラブメンバーたちの公園探検も残り少なくなってきた。12月の「冬の小鳥をさがそう」につづき「冬の昆虫をさがそう」という新年最初のミッションを得て、時折吹き付ける冷たい風の中、昆虫を求めて園路を歩く。しかし園路に虫の姿はない。木の枝を注意して見ていくと、風にゆれるチャミノガ、卵囊に守られたカマキリの卵、寒風を避けて団子状に集まっているアシナガバチなど、昆虫たちにもいろんな冬の過ごし方があることに感心しながら、帰りを急ぐ子どもたちだった。

## = 公園の植物 =

### ミチタネツケバナ（アブラナ科タネツケバナ属）

空き地や道端などに生える越年草又は一年草で草丈最長 30 cm位です。

早春から初夏にかけて莖頂に数mmほどの白色の四弁花をつけますが、今年はこの時期既に公園内で見ることができます。苗代に蒔く種籾を水に浸けるころに咲くタネツケバナに似ていますが、やや小型で「路種漬花」又は「路種浸花」と表記します。タネツケバナが水田などの湿地に生育するのに対し、乾いた場所で育つので「ミチ」を付けミチタネツケバナと命名されたようです。ヨーロッパや東アジア原産の外来種です。



# 公園をみる・観る

= う =



「平成最後」。昨秋あたりから耳にタコのできるほど聞いたフレーズだが正に平成最後の新年を迎えた。温かい新春。さすがに時折冷たい風が吹くが、日差しは早春を思わせる温みに溢れている。

淡水池ではカワウが浮島で羽を干している。のどかな風景だ。

ウはカモなどに比べ羽に油分が少ないので採餌のため水に潜ると羽がびしょ濡れになり重くて飛べなくなる。そのためウたちは羽を広げて乾かすのだ。公園ではこの「ウの羽干し」をよくみかける。世界には40種のウの仲間が

いるらしいが日本ではカワウとウミウが一般的。海岸近くで見かけるウもほとんどがカワウである。カラスとあまり変わらぬ全身黒尽くめなのにカラスほど悪行がうんぬんされないのは、ウの習性が古くから漁法の一つとして重宝されていたからだろう。岩国市・錦川の鵜飼も初夏の風物詩として毎年マスコミに取り上げられる。

日本書紀には、神武天皇のころ既に鵜養部門があったと記されている。5世紀から6世紀に築造された群馬県の保度田八幡塚古墳から、頸に紐を巻きつけ嘴には魚を啜えた鵜形埴輪が出土している。平治の乱時、平家に追われて敗走する源頼朝が、長良川で鵜飼の長から恵まれた鮎鮓の味に感激。幕府を開いた後、その鵜飼の長を招じ報いたとか。織田信長が長良川の鵜飼を見物し鵜飼たちに「鵜匠」の名称を授け、鷹匠と同様に遇したという話もある。鵜は飲み込んだ魚を食道で圧力をかけ一瞬にして気絶させるため、魚の鮮度を保つことが出来る。安土桃山時代より献上のため、地方の権力者達はそれぞれ専属の鵜匠と魚場を持っていたといい、ウは人間との関わりにおいてカラスとは一線を画していた歴史がある。麗らかな正月の気配のもと、ウの羽干しを眺めていたら以前目にした句を思い出した。

「茫々と 野焼きを待てり 鵜殿うどのよし葎」 能村登四郎という人の句だ。ウは冬の季語であり「うどのよし」とは大阪・高槻市に生える葎である。雅楽器、ひやりまき箏に使われる事から特別の葎として珍重されている。公園の葎も野焼きを待っている。公園のヨシ焼きは3月2日（土）に行われる。 （土×土）

## Kさんの、あんなとりこんなとり

庭に咲いているサザンカとロウバイの中をメジロが忙しく動き回っています。以前、鈴なりに実をつけていた小さなムラサキシキブの木に、10数羽ものメジロが入り込んで実をつついていました。そこへ、乱暴者のヒヨドリが脅すように飛んできてどこかに消えました。てっきりメジロたちは蹴散らされて逃げて行ったと思いきや、何羽かは枝にさかさまになってつかまり、ブランブランと余裕です。ヒヨが去ったのを見計らうと、みな次々に元に戻って実をついばみ、あっという間に丸坊主にしてしまいました。我が家のムラサキシキブはそれ以来さっぱり実をつけません。小さくて、きれいな黄緑色をしていて、目の回りの白いリングが可愛いらしいメジロですが、案外ちゃっかりとした強気な目をしているのを私は知っています。



*rigaiz*

# 活動紹介

## = 新春昼食会と全体ミーティング =



1月13日(日)公園の多目的室で新春昼食会が開かれました。16名の会員が集まって折り詰め弁当と飲み物で和やかに初春を祝いました。

そのあと昨年11月に予定されながらも延期されていた平成30年度全体ミーティングが行われました。まず、今までの活動を振り返り反省点や次回への要望などが話し合われました。次に平成30年度の残りの活動として3月2日(土)ヨシ焼き、3月24日(日)ボランティア説明会への公園との協働を確認しました。

また、次年度の活動にも話題が進み、葦の会は今年も元気一杯・精一杯の活動を決意しました。

## = クリスマスリースを作ろう、盛況のわけは =

毎年大人気のこの催しは昨年の12月15日の開催で10回目となりました。今回も募集開始後ほどなく定員に達し、葦の会もファイト満々で準備を開始しました。

まずは11月下旬からベースとなるクズのツル集めを始めます。藪にもぐり刃物を使うハードな作業なのでこれはおもに男性会員の仕事です。女性陣も頑張っ、集まったツルはきれいにしごいて太さや特有のカーブを生かしながら、リースの土台となる輪を作り乾燥させます。さらに常緑樹の枝木や紅い木の実など、個々の感性で「これは使える!」と思うものを搜して野山を歩き回ります。トベラ、ナンキンハゼ、ツルウメモドキなどなどや、折々に集めていたマツボックリやドングリも。まるで新居づくりに忙しい小トリのようにいろんな素材を公園に運び込みます。リボンやピカピカシールなど子供向けのオーナメントは常日頃からとり置いてあります。



準備万端整えての催行日、会場内は参加者と付添いの皆さんで大賑わい。午前・午後の二回、豊富な材料を駆使し素敵なリースが次々と仕上がっていきました。参加者のニコニコ顔を目にして葦の会メンバーも「喜んでもらえてよかった! 来年も頑張ろう!!」と大いに充実感を味わった一日となりました。

追記：これを読んでくださったあなただけにちょっとイイ話。木の実をいっぱい飾り付けたリースをクリスマスの後、庭の木に吊るしておく、小鳥たちがそのリースの木の实を食べにやってくる、聞き筆者も実行、我が家の庭にもシジュウカラが訪れてくれています。

～～表紙写真～～ 獲物をさがす鋭い目 大空を舞うミサゴ

(編集後記) 新年を迎え早ひと月、葦の会は新年昼食会と全体ミーティングを行い親睦を深めました。機関紙「よしきり」は7月に100号を数えます。皆様のご意見ご感想など賜れば幸いです。今年もどうぞ宜しくお願い致します。